

現代メキシコの若者たちの 結婚と恋愛

松久 玲子

●はじめに

近年のメキシコでは、結婚形態が多様化しつつある。私の知人のメキシコ人家族をみても、六人兄弟姉妹の内、長男はコスタリカ人と国際結婚の後、離婚し、メキシコの女性と再婚、二人の子どもがいるが、前妻との子どもに会いに時々コスタリカに行っている。次男は、メキシコ人と結婚した後離婚し、男手で子どもを育てている。長女は日本人と国際結婚し、家族とともに日本で暮らしている。次女は夫が亡くなり寡婦となった、ひとりで子どもを育てている。末娘は、結婚後五年ほどで離婚し、二度目の夫との間に子どもができて、今はとても幸せそうだ。末弟は、子どものある女性と結婚して、さらに二人の間に一子をもうけている。友人の一家は、メキシコシティで育ち、子ども全

員が大学教育を受けているメキシコの一般的な中間層と比べてよいだろう。この家族でも、国際結婚が珍しくなく、離婚も特別な出来事ではない。メキシコはカトリック教徒の多い国であり、若者（一二歳から二九歳）人口の八三％はカトリックだといわれている。市民婚の際に、嫁しては夫に従うことを誓うメルチョル・オカンポ書簡が読み上げられるという伝統的な儀式が未だに残存している。しかし、一九一七年家族関係法で離婚をいち早く認めた国であり、同性婚もメキシコ連邦区で合法化している。カトリックの伝統が強く、離婚を未だに認めない国があるラテンアメリカ諸国のなかで特異な国柄だろう。

かつて、一九七〇年代のメキシコは伝統社会と近代化された部分、農村と都市という二元論的社會観で語られていた。しかし、経済成長後の金融危機、構造調整、新自由主義経済を経てNAFTA加盟によるグローバル化の時代に入り、社会の流動化が急速に進んでいる。人口の一〇％程を占める先住民社会でもアメリカ合衆国への国際労働移動が普通に行われている。こうした状況なかで、現代のメキシコ人の結婚観、家族観はどのように変わったのだろうか。地方と都市の間には、まだ結婚観や家族への意識の差があるにはちがいないが、その差は縮まっているように感じられる。特に、最近の若者たちは、どのような結婚観や家族観を持って生活しているのかを見てみたい。

●統計からみた女性と結婚

メキシコの少女たちが一五歳になると、親は親戚知人を集めて「キンセニエーラ」と呼ばれる誕生祝いのパーティを盛大に行う習慣があり、それが娘たちにとっても憧れのひとつになっている。少女たちは、かなり前から考えて用意した美しい華やかなドレスに身をつつみ、両親や親戚、友人に祝福され、招待客たちからさまざまなお礼をもらい、賑やかな食事をする。父親のリードでダンスをし、親戚の男性、ボーイフレンドや友達と踊り、王女様のような一日を過ごす。「一日だけの女王さま」は「母の日」を揶揄した言葉だが、少女たちにとってこの「一日だけの王女さま」は、子どもから女性への通過儀礼であり、一人前の女性として社会にデビューするお披露目の意味があるようだ。国立人口審議会（CONAPO）の調査によれば、一五歳の独身女性の五二％に交際相手がいて、一八歳では七九％に上っている。少女たちにとって、まさに人生で一番華やかな節目のひとつなのである。

メキシコの成人年齢は一八歳、婚姻ができる年齢は男性一六歳、女性一四歳である。ただし、未成年者の結婚の場合は、親あるいは後見人の同意を必要とする。現代

のメキシコ人の平均結婚年齢は、次第に上昇してきている。一九九〇年には結婚平均年齢が女性二二歳、男性二四歳だったのに対し、二〇一一年にはそれぞれ二六歳、二九歳になった。教会や市役所で式をあげ役所に結婚届を出す婚姻数は、二〇〇〇年と比べ一〇年の間に二割近く減っている。一方で、事実婚（同棲）は増加傾向にあり、一九九〇年には男性の七・二%、女性の七・五%だったのが、二〇一〇年にはそれぞれ一四・八%、一四・一%と二〇年間で二倍近くに増えている。（参考文献①と②）。

女性の出産年齢は、二〇歳から二九歳の年齢層が最も多い。しかし、二〇歳以下の出産も一三・九%を占めている。一五歳から四九歳の女性ひとりあたり平均出産児数は二・二人（二〇一三年）で、一九七六年の六人と比べて大きく減少している。二〇一二年に出生届けがされた子どもの母親の内八八%は婚姻状態にあるが、この内事実婚が五〇%、婚姻届けをしている者が三八%で、シングル・マザーが一・五%を占めている。二〇〇九年において一五歳から四九歳までの女性を対象とした調査では、最初に性交渉を持つ平均年

齢は一九・六歳、最初の同棲は二一・八歳、最初の子どもの出産平均年齢は二二・三歳、初めての避妊年齢は二八・八歳という結果が報告されている（参考文献②）。長期的には結婚や妊娠年齢は上がっていて、特に二〇〇〇年以降のデータからは、最初の性交渉年齢が次第に早まる一方で晩婚化の傾向がみられる（参考文献③）。

離婚数は、年々増加傾向にある。二〇〇〇年から二〇一〇年の一〇年間で一・六倍になった。一〇〇組の夫婦の内一六組が離婚している。離婚の平均年齢は、女性三五歳、男性三七歳で、結婚生活一〇年未満で離婚するカップルが四六%と最も多く、次いで一〇年から一九年での離婚が三〇%、二〇年以上は二三%である。また、三〇歳から四九歳の既婚女性の内現在事実婚をしている三人にひとり

は再婚している。二〇一〇年の時点で、メキシコの全世帯数は約二八〇〇万世帯であるが、そのうち二五%が女性世帯主である。日本と同様に、メキシコでは、夫婦の内妻が世帯主になる場合は非常に少ない。子どもがいる夫婦は全世帯の内六五%を占めるが、そのなかで男性世帯主

世帯の割合は九五%である。三〇歳以下の男性世帯主世帯では、男性のみ働く世帯が七三%、共働きが二二%、女性だけが働いている世帯は一%である。三〇歳から五九歳までの男性世帯主世帯をみると、共働きが約三〇%に増加する。片親世帯は、全世帯の一九%を占めるが、そのうち女性世帯主は八四%、男性世帯主は一六%を占める（参考文献①）。

以上のデータからメキシコ版「女の一生」をみると、一五歳から一八歳ぐらいで男性と交際を始め、一九歳で性交渉を持ち、二二歳で二歳から三歳年上の男性と同棲をはじめ、二六歳ぐらいで結婚。二二歳から二九歳の間に子どもを二人産み、その後は避妊。子どもが小さい内は外で働く機会は少なく、子どもが成長するにつれて外で働き始める。離婚の割合も増え、離婚後に再婚することも珍しくな

い。（参考文献③）。二〇一〇年の青少年人口は三六二〇万人で、全人口の約四分の一を占めている。二〇一二年に二九州、一二六の市町村において、五〇〇〇人を対象に行ったサンプル調査のデータによれば、この年齢層の青少年の七五%が両親あるいは両親のどちらかと暮らしている。二〇歳から二九歳の年齢層でも六一%が親と暮らしていて、結婚しているのは三〇%弱、ひとり暮らしをしている若者は四・二%にしか過ぎない。一五歳から二九歳の経済活動人口をみると、就労者の割合は四七%、学生が二七%で残りの二六%は求職中か家事手伝いをしている。仕事をしても、親から独立せず、あるいはできずに暮らしている。近年メキシコでは、仕事も勉強もしていないメキシコ版ニート「ニニス (ninis)」と呼ばれる若者が社会問題となっていて。その数は七八〇万人で、若者の五人にひとり

がニニス状態にある。ニニスの四分の三が女性である。メキシコの若者は、ラテンアメリカ地域の青少年意識調査と比較しても、考え方が保守的だといわれている。政治への関心も低い。政治にほとんど関心がないと答え

る（参考文献③）。二〇一〇年の青少年人口は三六二〇万人で、全人口の約四分の一を占めている。二〇一二年に二九州、一二六の市町村において、五〇〇〇人を対象に行ったサンプル調査のデータによれば、この年齢層の青少年の七五%が両親あるいは両親のどちらかと暮らしている。二〇歳から二九歳の年齢層でも六一%が親と暮らしていて、結婚しているのは三〇%弱、ひとり暮らしをしている若者は四・二%にしか過ぎない。一五歳から二九歳の経済活動人口をみると、就労者の割合は四七%、学生が二七%で残りの二六%は求職中か家事手伝いをしている。仕事をしても、親から独立せず、あるいはできずに暮らしている。近年メキシコでは、仕事も勉強もしていないメキシコ版ニート「ニニス (ninis)」と呼ばれる若者が社会問題となっていて。その数は七八〇万人で、若者の五人にひとり

がニニス状態にある。ニニスの四分の三が女性である。メキシコの若者は、ラテンアメリカ地域の青少年意識調査と比較しても、考え方が保守的だといわれている。政治への関心も低い。政治にほとんど関心がないと答え

る（参考文献③）。二〇一〇年の青少年人口は三六二〇万人で、全人口の約四分の一を占めている。二〇一二年に二九州、一二六の市町村において、五〇〇〇人を対象に行ったサンプル調査のデータによれば、この年齢層の青少年の七五%が両親あるいは両親のどちらかと暮らしている。二〇歳から二九歳の年齢層でも六一%が親と暮らしていて、結婚しているのは三〇%弱、ひとり暮らしをしている若者は四・二%にしか過ぎない。一五歳から二九歳の経済活動人口をみると、就労者の割合は四七%、学生が二七%で残りの二六%は求職中か家事手伝いをしている。仕事をしても、親から独立せず、あるいはできずに暮らしている。近年メキシコでは、仕事も勉強もしていないメキシコ版ニート「ニニス (ninis)」と呼ばれる若者が社会問題となっていて。その数は七八〇万人で、若者の五人にひとり

がニニス状態にある。ニニスの四分の三が女性である。メキシコの若者は、ラテンアメリカ地域の青少年意識調査と比較しても、考え方が保守的だといわれている。政治への関心も低い。政治にほとんど関心がないと答え

●青年たちと恋愛・結婚

次に若者たちの恋愛・結婚について見てみよう。二〇〇〇年以降、毎年、メキシコ公教育省は一二歳から二九歳までの青少年を対象として青年意識調査を実施してい

る（参考文献③）。二〇一〇年の青少年人口は三六二〇万人で、全人口の約四分の一を占めている。二〇一二年に二九州、一二六の市町村において、五〇〇〇人を対象に行ったサンプル調査のデータによれば、この年齢層の青少年の七五%が両親あるいは両親のどちらかと暮らしている。二〇歳から二九歳の年齢層でも六一%が親と暮らしていて、結婚しているのは三〇%弱、ひとり暮らしをしている若者は四・二%にしか過ぎない。一五歳から二九歳の経済活動人口をみると、就労者の割合は四七%、学生が二七%で残りの二六%は求職中か家事手伝いをしている。仕事をしても、親から独立せず、あるいはできずに暮らしている。近年メキシコでは、仕事も勉強もしていないメキシコ版ニート「ニニス (ninis)」と呼ばれる若者が社会問題となっていて。その数は七八〇万人で、若者の五人にひとり

た若者が九〇%近くに上り、若者の半数は支持政党がない。一方で、最も重要と感じているのは、家族、お金、仕事、恋人・パートナーの順で、家族や恋人をつくることが若者にとって重要な部分を占めている。これらの若者の結婚状況を見ると、女子の場合、一五歳から一九歳の年齢層の一六%が結婚なしと同棲しているが、民法上の婚姻は四・六%にすぎず事実婚が一・四%を占めている。一五歳以下で結婚している女子も九万九〇〇〇人あり、その割合は未成年人口の五%を占める。

青年意識調査によれば、最初の性交年齢は一〇歳から一四歳が一・二%、一五歳から一九歳が最も多く七〇%、二〇歳以降は一〇%程度である。男性は女性よりも最初の性交年齢が早く、平均すると一六歳、女性は一七歳である。ほとんどの場合、「自分の意思で」と答えているが、「意思に反して」、つまり性暴力や家庭内暴力の結果と答えている女性が一・六%存在する。

この青年期の若年妊娠（一五歳から一九歳）は、メキシコで社会問題として認識されている。一般に若年妊娠の割合は減少しつつあ

るが、女子の人口増加にともない実際の出生数は減少していない。一五歳から一七歳の年齢層では六・六%、一八歳から一九歳の年齢層では一九・二%が妊娠経験をもっている。しかし、一概に若年妊娠といっても都市と農村、あるいは社会階層によってその特徴は異なる。若年妊娠の七四%は、貧困層と中間層の場合、女子の労働の場は少なく、結婚や母親となることで女性にとって主要な選択肢となっている。したがって、若年妊娠は結婚後妊娠する場合が多い。また、貧困層の若年妊娠は、就学を妨げる原因として捉えられているが、実際は妊娠以前に学校を中退している場合が大部分で、経済的理由から学業をやめることが多く、妊娠は主要な中退の原因ではない。

一方、都市の中間層と富裕層では若年妊娠の割合が増加している。この場合の若年妊娠は、結婚前の独身での妊娠が多く、学校の中退の主要な原因となっている。都市では、女性を含め教育機会が拡大し、労働市場への女性の参加が晩婚化を促進している。婚前交渉に対する社会的な非寛容が性交

育を遅らせ、避妊法に関して知識はあるが使いこなせていない状況が都市での若年妊娠を引き起こしている。また、最近の傾向として、アメリカ合衆国との国境周辺地域において若年妊娠の割合が増加している。

● 恋愛の諸相

これまで異性婚を中心に述べてきたが、メキシコには近年同性婚のカップルが登場している。メキシコ連邦区では、二〇〇九年にラテンアメリカではじめて養子を認めることを含めた同性婚を合法化し、二〇一一年には八〇二組の同性婚の届けが受理された。同法の発効から二〇一一年までに一四九一組が結婚届けを出している。また、現在、コアウイラ州、キンタナ・ロウ州、コリマ州、ハリスコ州で同性婚が合法化されている。カトリック教が強い影響力をもち、男らしさを誇示するマチスモが払拭されていないメキシコでは、同性愛に対する理解はなかなか得られにくい。大部分の州では異性婚と同様の権利を保証する同性婚は合法化されていないが、次第に人権団体の援助を背景に、同性婚の申請が行われ、連邦区以外でもシビ

ル・ユニオンのカップルが誕生している。若者の間には、同性婚に対して少しずつ意識変化の兆しが見られる。青年たちの同性婚に対する意識をみると、四四%が肯定的で、反対が三三・四%である。しかし、同性の夫婦が子どもを持つ権利については、ほぼ三〇%近い若者が賛成だが、四八%は反対している。

若年結婚や性交渉の早期化を背景に、女性の権利あるいは男女平等政策の一環として、世界的にドメスティック・バイオレンスやその前段階での「交際の暴力（デーティング・バイオレンス）」への取り組みが注目を浴びている。メキシコでも、二〇〇七年に一五歳から二四歳の年齢層で同居していないカップルを対象として、ラテンアメリカ初の大規模な「交際の暴力」に関する調査が全国レベルで実施され、これ以降、国勢調査にもこの項目が反映された（参考文献④と⑤）。調査対象者の二六%が既婚、七三%が独身である。独身の若者の内、恋人がいると答えているのは五二%で、知り合ってから一カ月以内に交際を開始しているカップルが多い。調査によれば、交際期間が長引く内に暴力が発生

する傾向があり、相手への期待を裏切られることによる諍いが引き金となっている。諍いの結果として、身体的暴力を経験した若者が一五%、言葉による暴力や侮辱などの心理的暴力を経験した若者が七六%、そして女性の一六・五%が付き合っている相手から性的暴力を経験したと述べている。

交際の暴力は、相手への期待が裏切られたことがきっかけとなっており、そうした期待は既存の女らしさや男らしさに縛られているようである。例えば、調査

対象の三三%が「男性は本質的に誠実でない、浮気をする」と考えている。特に女性は三七%がそう考えていて、男性への不信が強い。また、女性へのジェンダー役割観

が強く、七六%の若者が「病気の時の子どもの世話は女性が適している」と考えている。大部分の若者が「男性は家計を支える大黒柱であり、家族の意思決定を行う」

ことを肯定的に受け入れている。また、三六%が「交際のデート費用は男性もち」が普通だと考えている。一方で、「女性が有償労働をしていなくても男性は家事に協力すべき」を肯定する若者は六二%いる。また、「男性は唯一の

家計維持責任者」、「家事は女性」、「男性は女性より多く稼ぐのが当然」には、それぞれに六二%、六七%、六九%が反対している。頭では男女平等を理解していても、いざ日常生活では旧来の男らしさ、女らしさの価値観から自由になれない若者像が浮かび上がってくる。同性婚や恋愛相手に対する反応をみると、若者の間に男らしさや女らしさへの期待やジェンダー役割についてまだ強い刷り込みがみとれる。

●おわりに

以上で紹介したメキシコの若者像をみると、日本や欧米とほとんど同じような傾向を見出すことができるのではないだろうか。メキシコでも、若者の親からの独立が次第に遅くなっている。早期に交際をはじめてもなかなか結婚に踏み切れないでいる。NAFTAに加入し、手に届く近さに豊かさを感じながら、なかなか手に入らない。仕事も学業も手にできない。ニスが社会問題となり、結婚するための経済的基盤がなかなか築けない。これらが、晩婚化につながっている。

また、統計的な平均値ではみえ

ない地方と都市の格差や階層間の格差は依然として存在している。ここでは、地方の農村や先住民の若者たちの結婚観に迫ることはできなかったが、メキシコにもグローバルゼーションの波は確実に押し寄せており、今後そうした国際労働移動の波に乗って国境を超えて働きに行く若者たちが増加するなかで、「伝統的」と考えられている結婚観も、次第にボーダレスな状況を迎え、先鋭化する経済・社会格差が結婚や恋愛のあり方を規定するようになるのではないだろうか。

(まつひな れいこ)同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授

《参考文献》

① INEGI 2014. *Mujeres y hombres en México 2013*. México.
 ② INEGI 2011. *La Encuesta Nacional de la Dinámica Demográfica 2009: Panorama sociodemográfico de México*. Principales indicadores de salud reproductiva ENADID 2009.
 ③ SEP, Instituto Mexicano de

la Juventud 2012. *Encuesta nacional de Valores en Juventud 2012*. Informe Gráfico. Octubre.

④ Instituto Mexicano de la Juventud 2008. *Encuesta Nacional de Violencia en las Relaciones de Noviazgo 2007- Resumen Ejecutivo*. 22 de Julio. México.

⑤ INEGI [二〇一] 『世帯における関係の動態調査』(a Encuesta Nacional sobre la Dinámica de las Relaciones en los Hogares, ENDIREH) および『公共安全認識と被害に関する全国調査』(a Encuesta Nacional de Victimación y Percepción de la Seguridad Pública(ENVPE) 2012)。